新収作品：ジョルジオ・ヴァザーリ《ゲッセマネの祈り》

昭和54年度の新収作品（絵画）について

New acquisitions (Painting)

国立西洋美術館は，昭和54年度に1億6,060万円の購入費をもって，絵画5点，素描1点，版画3点を購入し，さらに，絵画1点，版画4点の寄贈を受けた。これらの作品のデータについては，別項の新収作品目録に譲って，ここでは，油彩画作品についてのみ簡単に解説したい。

レオンブルーノ・ダ・マントヴァ
《キリスト降誕》

ロレンツォ・レオンブルーノの生涯およびその制作活動に関しては多くは知られていない。初期を生地マントヴァで過ごしたのち，1504年にイザベッラ・デステ・ゴンザーガの仲介でフィレンツェに赴き，ウンブリア派の画家ペルジーノの工房を訪れている。1506年，マントヴァに戻り，1511年以降，歿するまでゴンザーガ家の宮廷画家として活躍した。その間，1511年にヴェネツィア，1521年にローマに旅行し研鑽を積んだ。1524年にはジュリオ・ロマーノの指揮のもと，パラッツォ・ディ・マルミローロの回廊の装飾に携り，またミラーノでも仕事をしたことが伝えられている。彼が影響を受けた画家として，ロレンツォ・コスタ，マンテーニャ，コレッジオ，ジュリオ・ロマーノなどの名があげられている。

この《キリスト降誕》はヴァーゲン博士の著『大英帝国の美術品』(1854) で初めて公けにされたが，当時署名が塗り潰されていたのか，北イタリアの画家ガウデンツィオ・フェラーリの作とされた（それ以前はペルジーノに帰されていたらしい）。構図は厩の前に聖家族のいる前景から，天使に導かれて塀越しに彼らを覗き見る羊飼いたちの中景，そして民家や，濠を廻らされた城から厳しい岩山へと続く遠景へと自然に展開し，色彩は鮮やかで変化に富んでいる。前景の人物にはコレッジオの影響が認められる一方，左背後の魅力ある風景描写にはミニアチュール画家としての彼の繊細な感覚と，北方，特にフランドル的技法が窺見される。今日あるレオンブルーノの確実なタブロー画は，マンテーニャ風にモノクロームで描かれた《誹謗》（ミラーノ，ブレラ美術館），《寓意》（フィレンツェ，ウフィーツィ美術館），《ミダスの審判》（ベルリン，国立絵画館）など数点しかないので，本作品は小品ながらもその貴重な一点と言えよう。

ナティエ
《マリー＝アンリエット＝ベルトレ・ド・プルヌフ夫人の肖像》
1739年

ジャン＝マルク・ナティエは，1685年3月17日パリに生まれ，1766年11月7日に同地で歿した。父のマルク・ナティエは肖像画家，母のマリー・クールトワは細密画家であった。彼は両親について絵を習い，1703年王立アカデミーに入学。またその直後ルイ十四世の許しを得て，リュクサンブール宮殿にあったルーベンスの連作《マリー・ド・メディシスの生涯》を版画にするため，兄のジャン＝バティストと協力して，その下絵素描を制作している。その後は，1745年フランスの宮廷画家となる一方，1746年フランス王立アカデミーの準教授，1752年教授に就任した。またその間，彼は歴史画のほか肖像画

にも優れていたことから，1715年アムステルダムやハーグに呼ばれて，西ヨーロッパ歴訪中のピョートル大帝をはじめとするロシア宮廷の人々の肖像を描いている。フランスで王妃や王女をはじめ多くの貴婦人の肖像画を残したことは言うまでもない。

彼はニコラ・ド・ラルジリエールの影響を受けて，宮廷の貴婦人たちを神話の中の人物の姿を借りて描くというフォンテーヌブロー派の伝統を復活させた。画面左下に描き添えた水瓶に Nattier p. / 1739 という署名年記のあるこの肖像画も，モデルを川ないし泉の女神に擬して描いており，この系列に属する作品といえよう。

本作品の来歴は別記のとおりであるが，最初はこの絵のモデルであったド・プルヌフ夫人のもとにあった。

デュビュッフェ
《美しい尾の牝牛》
1954年

第二次大戦後の1954年11月の制作になるジャン・デュビュッフェ作《美しい尾の牝牛》は，文字通り現代芸術の一焦点を示す作例として，ルネッサンス以後近代にかけての作品を主体とする当館の収蔵品中では時代的にとび離れているが，寄贈者平野逸朗氏の特別の意志によって当館が受理することになったものである。もともと当館には同じ作者による《ご婦人のからだ》(1950年作，山村コレクション)があるので，戦後美術の展開に重要な役割を果したデュビュッフェの作品が，これによって計2点に増えたことになる。しかも《ご婦人のからだ》が作者のいわゆる「人体シリーズ」中の佳作であるのに対して，今回寄贈された作品はそれに続く「牝牛シリーズ」の中の代表作であるという関係から，多彩な創作をすすめたこの作者の一時期の仕事ぶりが連続的，発展的に眺められるようになった点で，大変幸いであったと言わなければならない。伝統や教養を否定する「生の芸術」の提唱者である作者はここで，野性にみちた有機的生命体である牝牛を，児童画にも似た自由さで把え，基本的形態と純色の交錯により極めて大胆卒直に描き表わしている。

ヴァザーリ
《ゲッセマネの祈り》
1545／46年頃

「ゲッセマネの祈り」を主題とするヴァザーリの絵画作品が少くとも4点あったことは，彼の『美術家列伝』中の自伝，および覚書，書簡等から知られる。この4点の《ゲッセマネの祈り》に該当する作品は現在のところ発見されず，ヴァザーリ研究で著名なパオラ・バロッキもそれらを彼の消失絵画作品リストに含めている(P. Barocchi, "Complementi al Vasari pittore", in: *Atti dell'Accademia toscana di scienze e lettere, La Colombaria*, XXVIII, 1963-64, p. 293.)。ところでバロッキは上記4点の《ゲッセマネの祈り》のうち，ヴァザーリが1545年にローマでラファエルロ・アッチァイウオーリ Raffaello Acciaiuoli のために描いた作品に関連する素描として，大英博物館所蔵のクリストーファノ・ゲラルディ (Cristofano Gherardi, 1508-1556) に帰されているものと，ルーヴル美術館所蔵の

ヴァザーリ自身の手になるものとをあげている(P. Barrocchi, *Vasari Pittore*, Milano 1964, pp. 130-131)。両素描とも画面手前に眠り込んだペテロ，ヤコブ，ヨハネの三使徒，彼らの背後の祈るキリスト，その頭上で盃を取り彼を力づける飛翔天使，画面片隅のユダに導かれて剣や棒を手にした群衆といったモティーフをほぼ同じ構図にまとめ，様式的にも近い。クリストーファノ・ゲラルディ通称ドチェーノはヴァザーリの良き協力者であり，ヴァザーリの1543年からのローマ，ナポリにおける制作活動にも参加しているので，《ゲッセマネの祈り》を含めて「キリスト受難」の連作をアッチァイウオーリからヴァザーリが委嘱された際，両者が協力して構想を進めたのかも知れない。いずれにせよ当館が購入したヴァザーリの《ゲッセマネの祈り》はモティーフや構図の上で上記2点の素描に良く似ており，バロッキが指摘するようにアッチァイウオーリの《ゲッセマネの祈り》の異作(ヴァージョン)の可能性は充分にある。キリストの表情や天使の身体つきはルーヴルの素描と共通し，ヨハネの頭部はヴァザーリの描く聖母のそれに通じる。またやや硬質な衣襞の処理もヴァザーリの特徴である。最近，ローマにおけるヴァザーリの制作活動に関する研究論文を著わしたチャールズ・デイヴィスは(Charles Davis, "Per l'attività romana del Vasari nel 1553: Incisioni degli affreschi di Villa Altoviti e la Fontanalia di Villa Giulia", in: *Mitteilungen des kunsthisthistorischen Institutes in Florenz*, XXIII Band, 1979, Heft 12, pp. 197-224)，ある私信の中で本作品を，ヴァザーリが制作に際して多くの助手たちにその仕上げを委ねた時期以前の，彼の比較的初期の作としているが，1545—46年頃という制作時期はデイヴィスの推測とほぼ合致するように思われる。

ランクレ

《眠る羊飼女》

1730年頃

ランクレは，同時代人ヴァトーと同じく，雅宴画や田園の中での人物の描写を得意とした。この作品は，ルイ十三世治下の財務長官兼公安長官ジャン・ブーロンニュ Jean Boullongne によって，パリのヴァンドーム広場に面していた彼の館（オテル・ド・ブーロンニュ）のサロンの装飾として，やはりランクレの手になる他の8点の作品とともに註文されたものである。建物は，1717年頃，当時の財務長官ジョン・ローの館として建てられたものであるが，ジャン・ブーロンニュの財務長官就任の時期から考えて，彼がこの館に移り住み，サロンの装飾をランクレに依頼したのは1730年頃と思われる。

オテル・ド・ブーロンニュのサロンを飾った9点のランクレによる作品は，1896年に売立てに付され，現在は分散しているが，本来の配置は，サロン内を写した古い写真によって知ることができる（Wildenstein, fig. 82 参照)。9点のうち5点（《踊り子》，《ジル》，《女巡礼》，《日傘を持つ婦人》，《トルコ人》）は，鏡，戸口などの間の壁面にはめ込まれたもので，それぞれ，細長い画面の中央に一人のたたずむ人物を表わし，上下を天蓋，唐草模様等で埋めている。他の4点のうち本作品を除く3点（《ぶらんこ》，《かごの中の鳥》，《風笛》）は戸口上部を飾って

いたもので，それぞれ，やや縦長の円形の画面の中に，田園風景の中で戯れる一組の男女を描き出している。本作品は，サロンの中央，暖炉および鏡の上を飾っていたもので，戸口上の3点に近い主題を扱っている。

「眠る羊飼女」という主題は，ランクレの他の作品にもしばしば見られるものであるが，人物の姿や服装は，理想化，貴族化されている。

ドーミエ
《マグダラのマリア》
1849／50年頃

また今年度は19世紀のフランス美術界で特異な位置を占めるオノレ・ドーミエの油彩習作を購入した。彼は国王ルイ・フィリップを批判した罪で投獄されたこともある諷刺画家として世に知られ，生涯に制作した4000余点に及ぶ石版画を通じて，痛烈な政治諷刺や風俗漫画に才腕を揮った。しかし彼は40歳を過ぎるころから一方で油絵制作も手がけ，生来の批判精神に徹したヒューマニスティックな佳作を数多く残している。

1848年にドーミエはクールベらに唆されて，美術学校で催された「共和国」という課題の油絵コンクールに応募した。結果は応募500余点中の優秀20作品のうちに入り，第二次審査のため大作を提出するよう求められる。しかし彼は，事前にそのための前渡金をうけとったにもかかわらず，これに応じなかったため，その代償として翌年美術監督局から，ある地方教会のために宗教画を制作するよう依嘱されることになった。この絵は上記の経緯を継ぐものとして，1849年に当時の美術監督官フランソワ・カヴェから公式に依嘱された宗教大作のための油絵スケッチとされる。結局その大作は再び制作されずに終ったが，そのための構想を示すものとして本図と，これに関連する木炭素描（K. E. Maison, Vol II, no 743）が残され，本図はカヴェによって購入されたのか，それとも作者から贈られたのかは不明ながら，1928年まで同家の所蔵品として伝世した。一切の装飾的要素を排除した荒削りな描法や，明暗の激しい対比のうちに対象を鋭く浮き上らせる表現は，作者の画風を実によく示しているものといえよう。

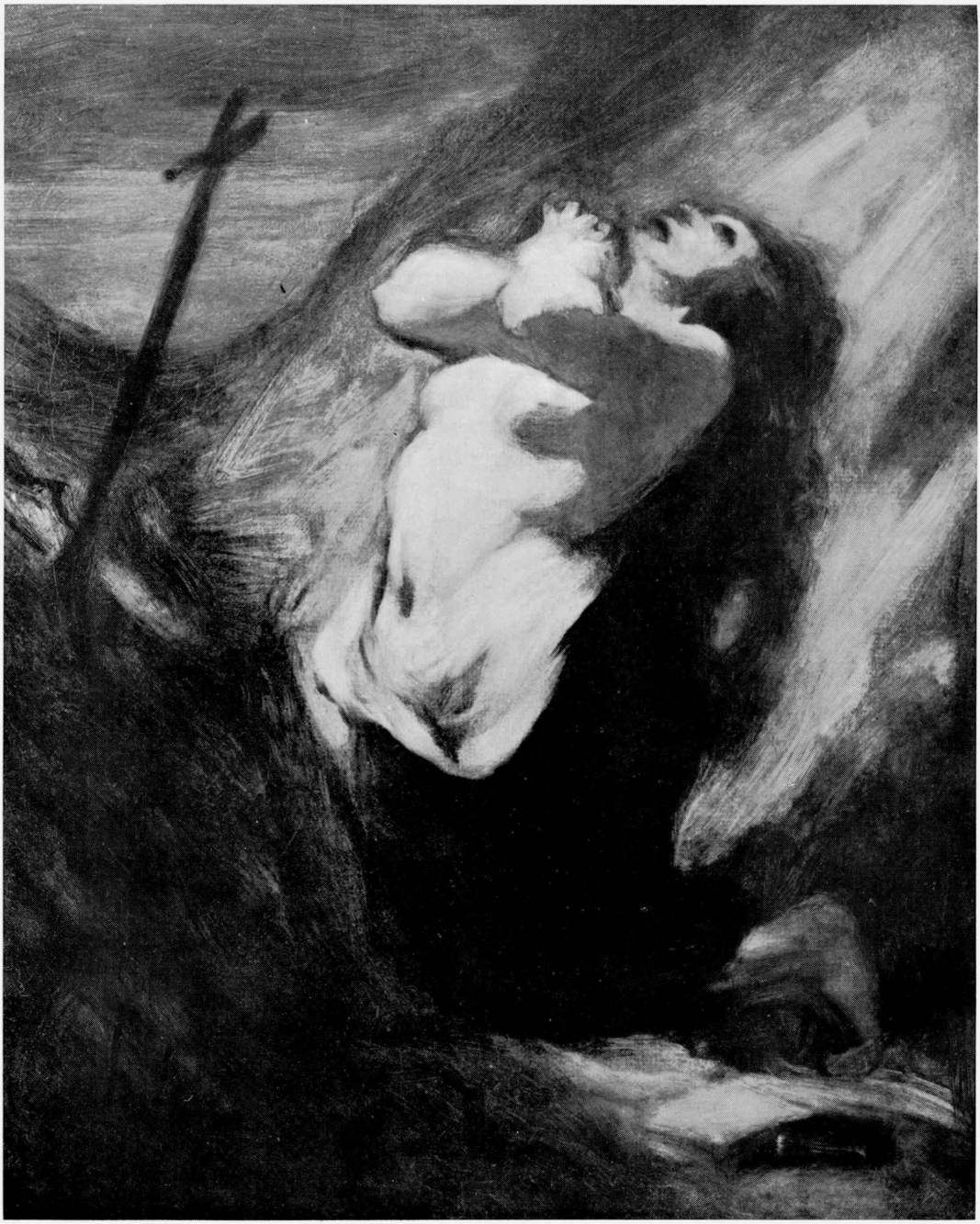
Lorenzo Leonbruno da Mantova. The Nativity.
Tokyo, National Museum of Western Art.

Jean-Marc Nattier. Portrait of Madame Marie-Henriette Berthelet de Pleneuf, 1739
Tokyo, National Museum of Western Art.

Jean Dubuffet. Cow with a beautiful tail, 1954
Tokyo, National Museum of Western Art.

Giorgio Vasari. The garden of Gethsemane, c. 1545/46
Tokyo, National Museum of Western Art.

Nicolas Lancret. Sleeping shepherdess, c. 1730
Tokyo, National Museum of Western Art



Honoré Daumier. Mary Magdalene, c. 1849/50
Tokyo, National Museum of Western Art